

# 島根県邑智郡石見町 町内遺跡詳細分布調査報告書 I

— 石見町の遺跡第二集 —

1991

石見町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、平成2年度国庫補助事業として石見町教育委員会が実施した町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は、矢上、中野地区の一部を中心として行った。
3. 調査は平成2年9月1日から平成3年2月15日までのうち、延べ20日間実施した。
4. 調査の組織は以下の通りである。

調査員　田中 義昭（島根大学法文学部教授）

　　渢 健一（石見町教育委員会社会教育課主事）

調査補助員　磯村 賢治、勝瀬 利栄、原田 敏照、守岡 正司、柳原 博英  
水口 品郎、遠藤 直子、宮田 健一、合田由美子、小内米太郎  
(以上、島根大学学生)

駅場 春樹、渡辺 恒知、藤田 典幸、天川 藤信、柘植 勇人  
橋田 稔(以上、故里を探る会)

調査指導　島根県教育庁文化課

事務局　兼 常磐（石見町教育委員会 教育長）

　　服部 忠司（　　〃　　社会教育課 課長心得）

　　松川 伸作（　　〃　　社会教育課 社会教育主事）

　　土居 達也（　　〃　　社会教育課 派遣社会教育主事）

5. 本書に使用した地図は主として、石見町農林課所管にかかる地図を使用している。
6. 分布調査は地表面の観察調査によるものである。したがって、本書に掲載されている遺跡の他にも、その存在する可能性がある。
7. 本書の執筆及び図面の清浄は主として田中、渢が行い、編集は渢が行った。
8. 本書に使用している座標は、国土座標第III系である。
9. 調査により作成された遺跡台帳は、石見町教育委員会で保管している。
10. 今回の調査に当っては、地元中野公民館をはじめ、地権者各位に多大な協力支援を頂いた。記して謝意を表したい。

## 発刊にあたり

石見町には、銅鐸の出土を始め多くの埋蔵文化財があると云われながらその所在については、十分な調査が実施されていません。

急激に進む生活環境の近代化に伴い、生活様式も変化しこれに対応する環境開発も進められてきました。

この度、石見町では国の補助事業を受け町内遺跡の分布調査を実施いたしました。この調査が、有効適切に活用され文化と調和のとれた石見町発展に寄与することを願うものであります。更にこの調査によって古代の歴史が解明され、石見町の歴史に新しい頁を書き加えることができますならば、文化財保護に対する認識も一層深まつくるものと思います。

今回の調査にあたり、御協力を賜りました島根大学の田中義昭先生、同大学の学生の皆さん、及び地元の「故里を探る会」の会員有志の方々に対し、深く感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成3年3月

石見町教育委員会

教育長 兼

當 磐

## 目 次

I. 調査の経過.....	1
II. 遺跡分布図.....	3
III. 遺跡一覧表.....	18
IV. 調査の概要.....	20
V. まとめ.....	26
図 版.....	30

## I. 調査の経過

石見町の於保地盆地から瑞穂町に至る邑南地域一帯は、良質の砂鉄が採集されていたことにより、古くからたらによる製鉄が盛んに行われていた地域であった。現在石見町内には、砂鉄採集の為の鉄穴流しにより削り残された、いわゆる鉄穴残丘が隨所に見られる。しかし地域を支えていた重要な産業であったたら製鉄について、その実体は不明な点も多い。今回の分布調査の第一の目的は、たらを主とした製鉄関係の遺跡の分布状況を調査することである。また石見町では早くから圃場整備事業に着手しており、現在の進捗状況は町内で90%を越え、このことは農業基盤の安定に大いに寄与している。その反面、文化財保護の観点から言えば、多くの遺跡を失っていることも事実であろう。そのことに加え、大小規模の開発行為による遺跡の損壊も少なくはない。近年ではリゾート開発（平成3年2月、石見町の一部について、島根県中央地区リゾート構想監視区域の指定を受ける）等の開発行為も予想され、文化財保護行政の果たす役割は、ますます重要になってくると思われる。遺跡保護を円滑にはかっていく為にも詳細な分布調査が必要であった。これが調査の目的の第二点である。

石見町教育委員会では、矢上、中野地区について平成2年度及び3年度の2ヶ年計画で国庫補助事業としての町内遺跡分布調査を実施することとし、今回の調査は、その初年度にあたる。調査は石見町教育委員会が主体となり、島根大学考古学研究室の協力のもと平成2年9月1日から平成3年2月15日までの間に、延べ20日間行った。



石見町位置図



調査区位置図

## II. 遺跡分布図



城砦



製鉄遺跡



古墳、古墓



古墳群の範囲



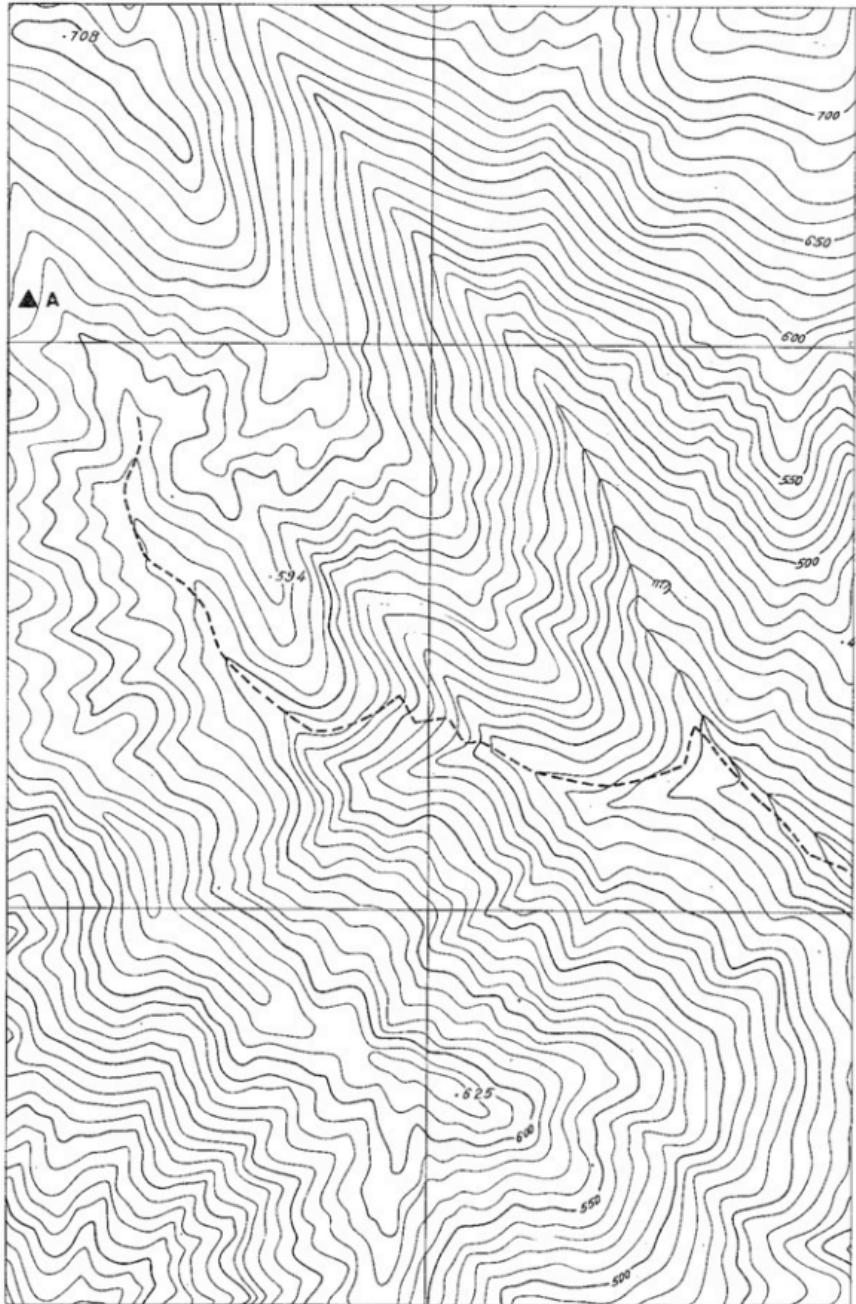
散布地、集落跡の範囲

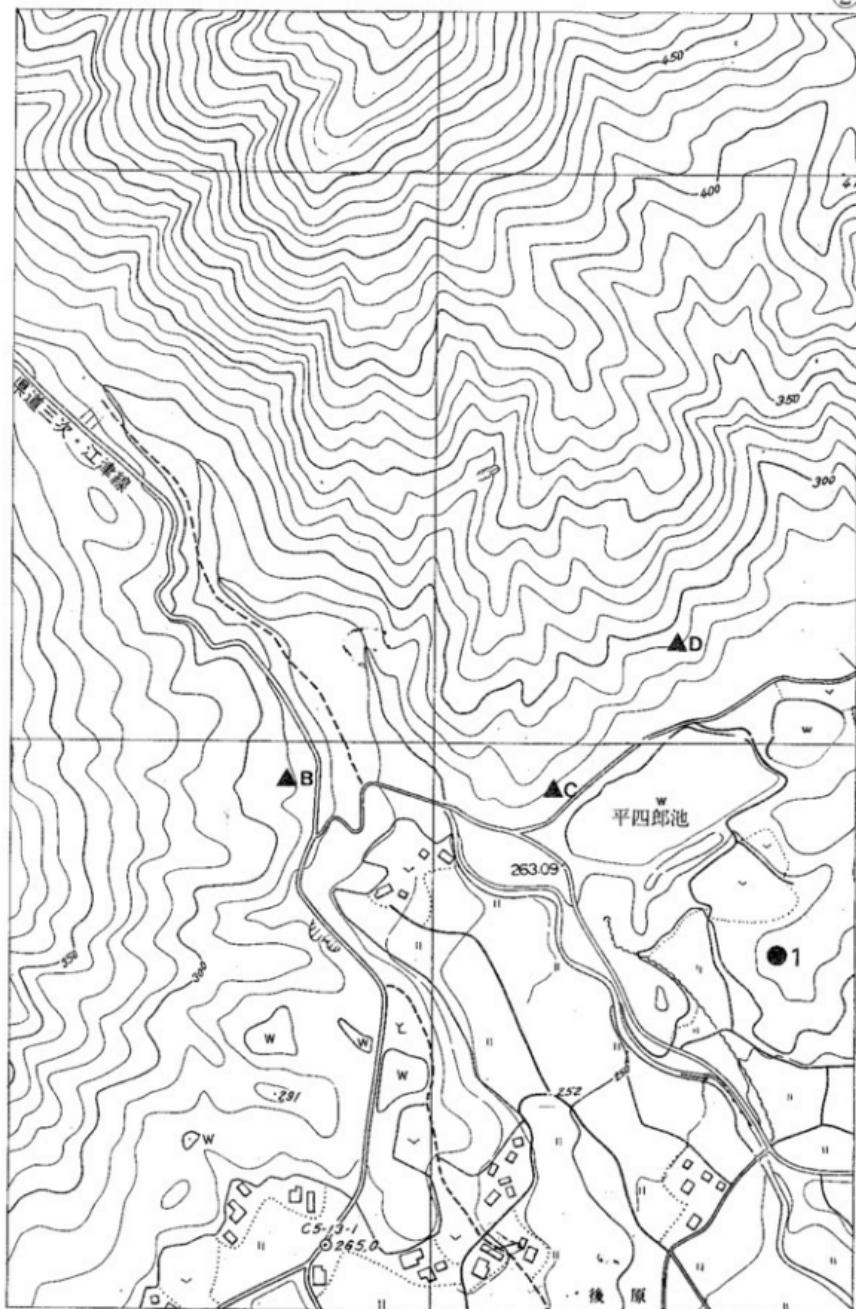


その他、山城等の範囲

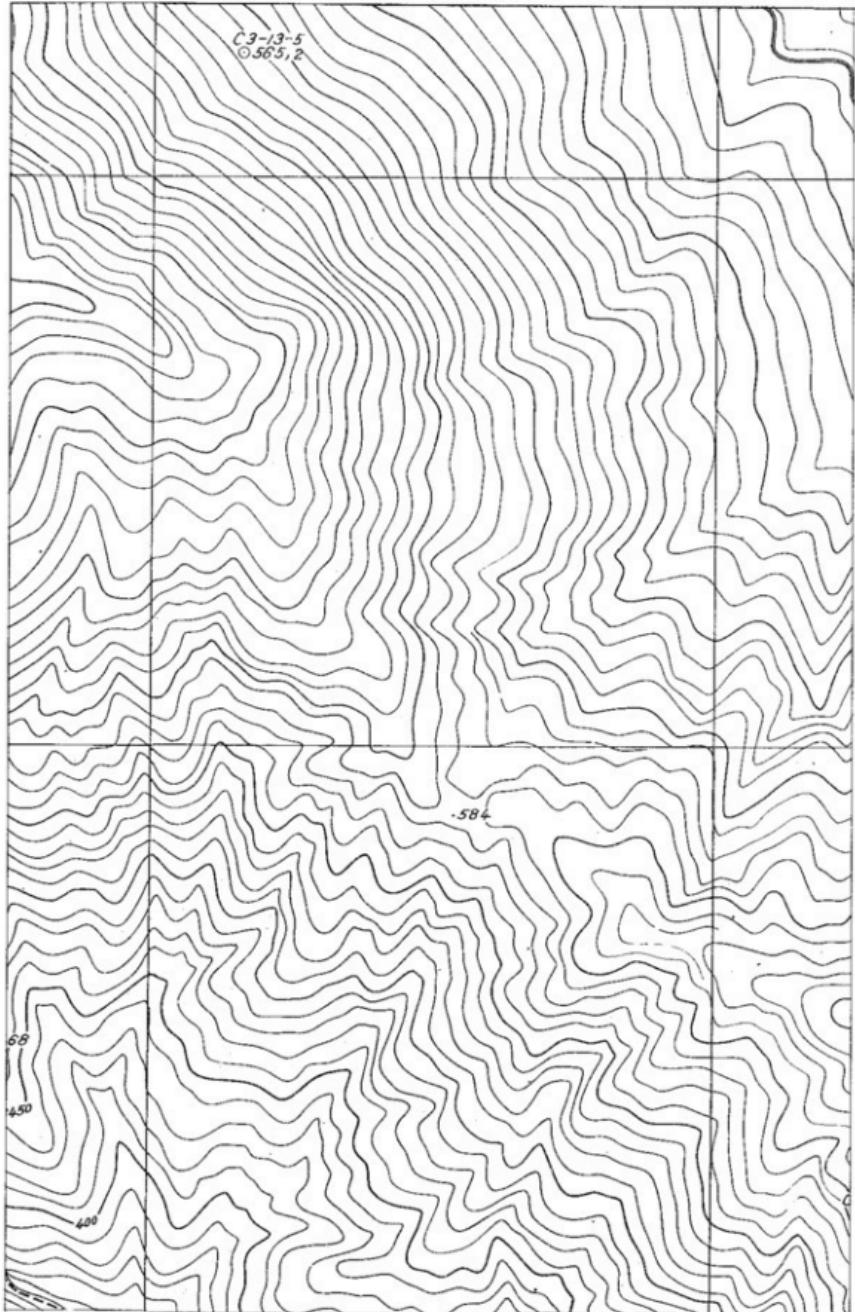
(1 : 5,000)

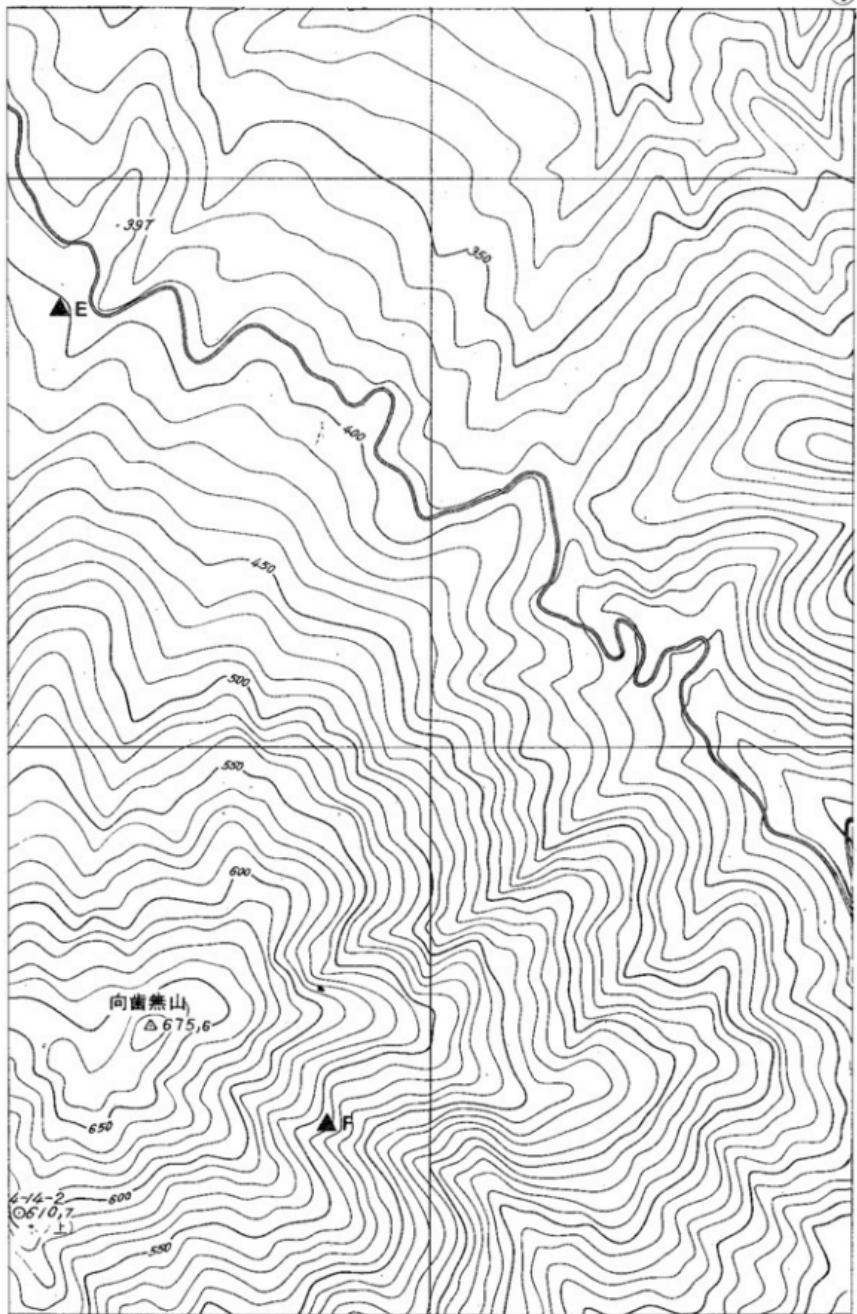
①



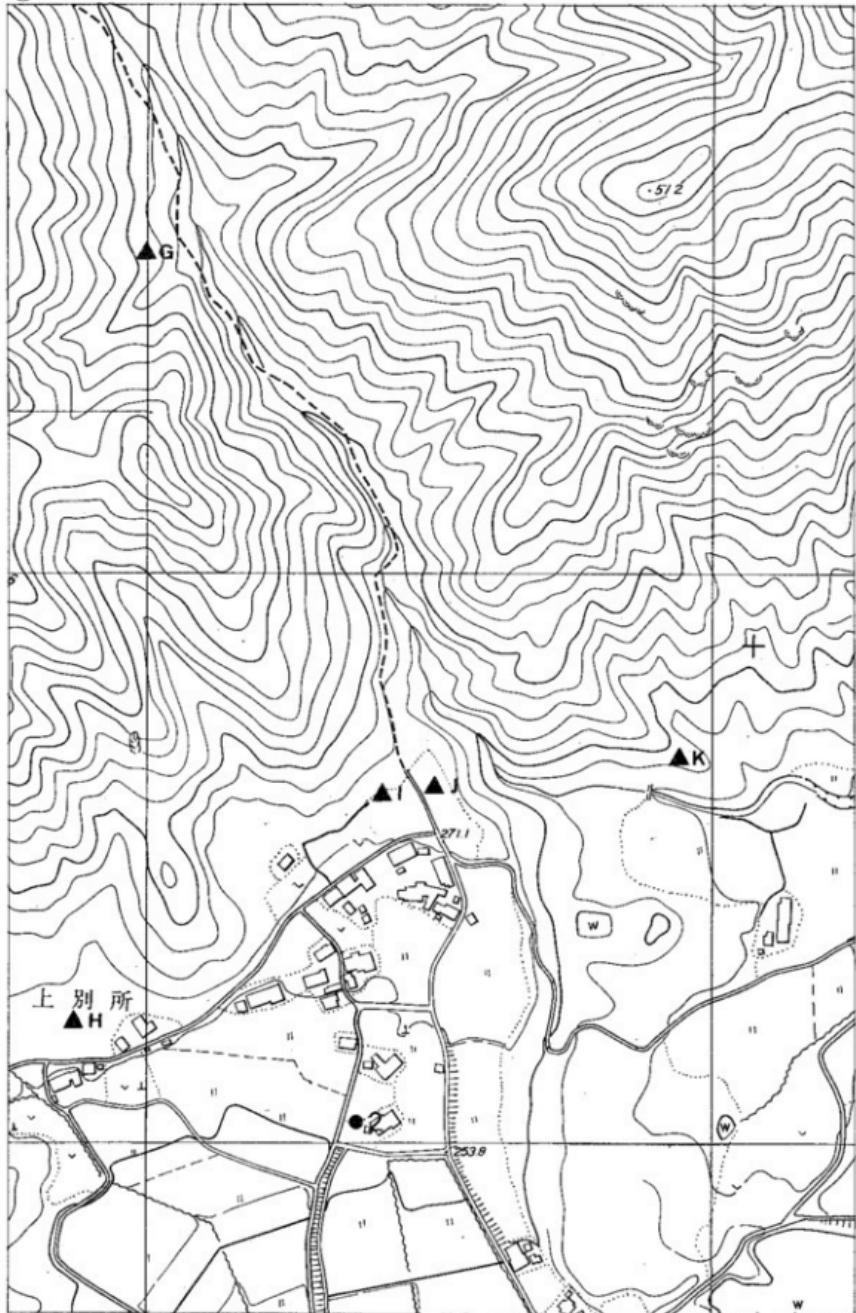


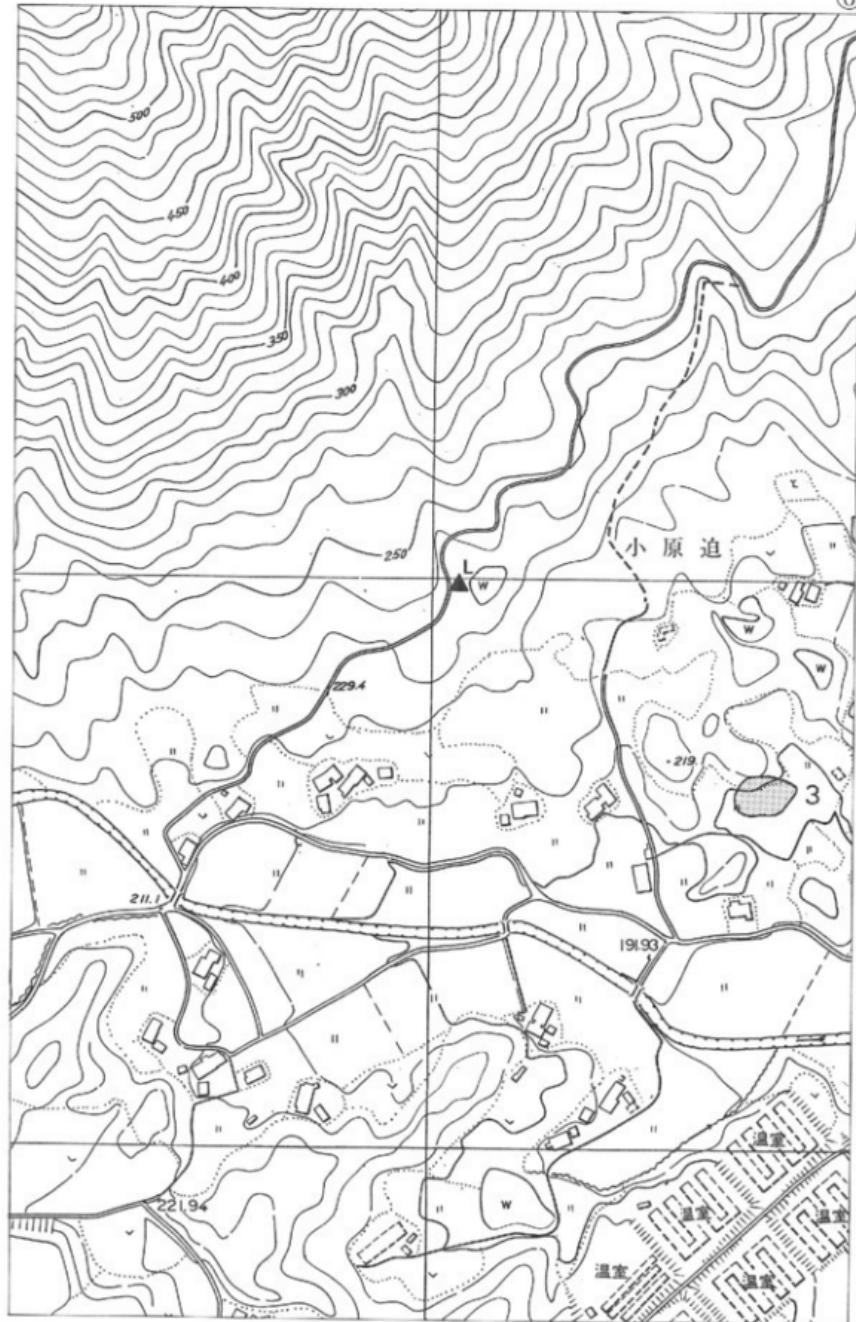
(3)



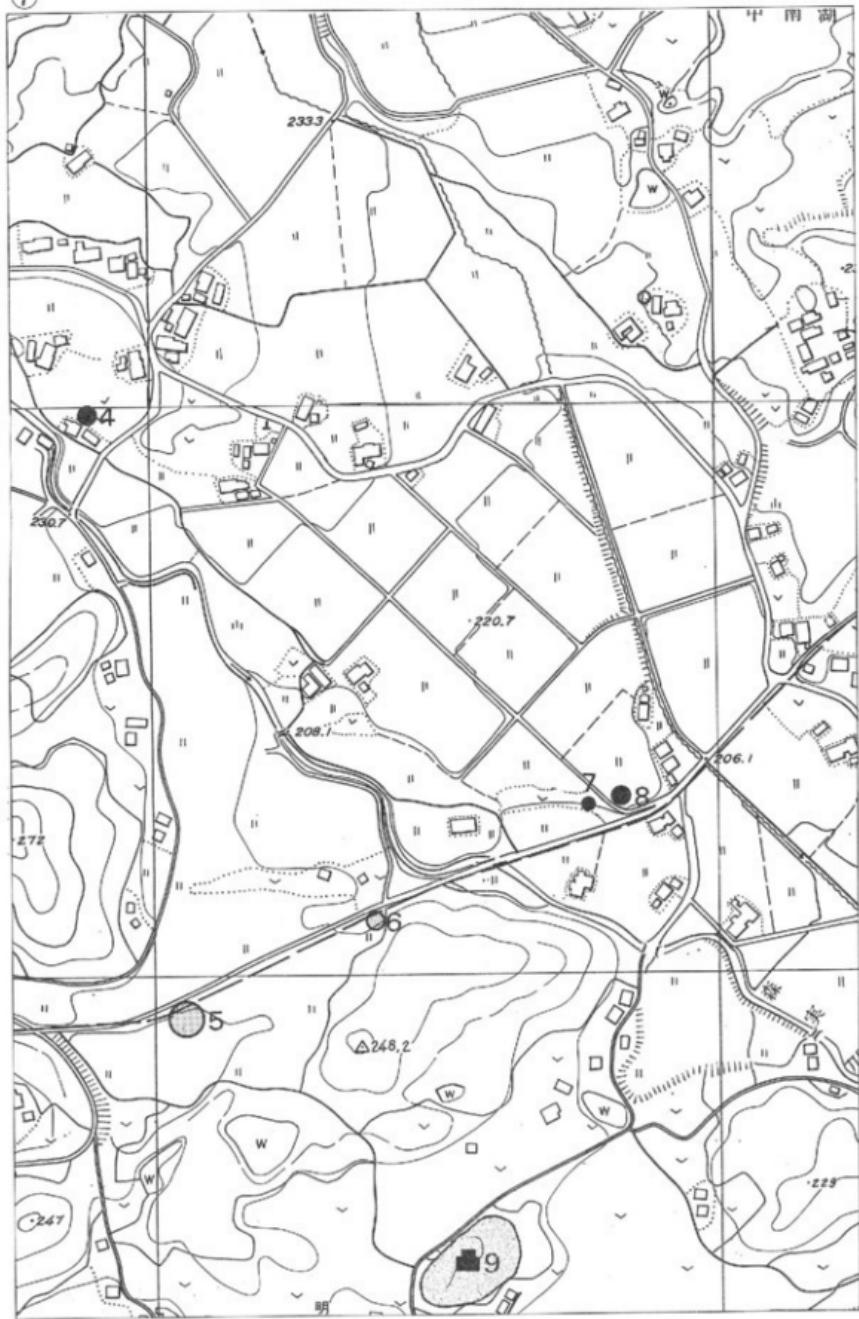


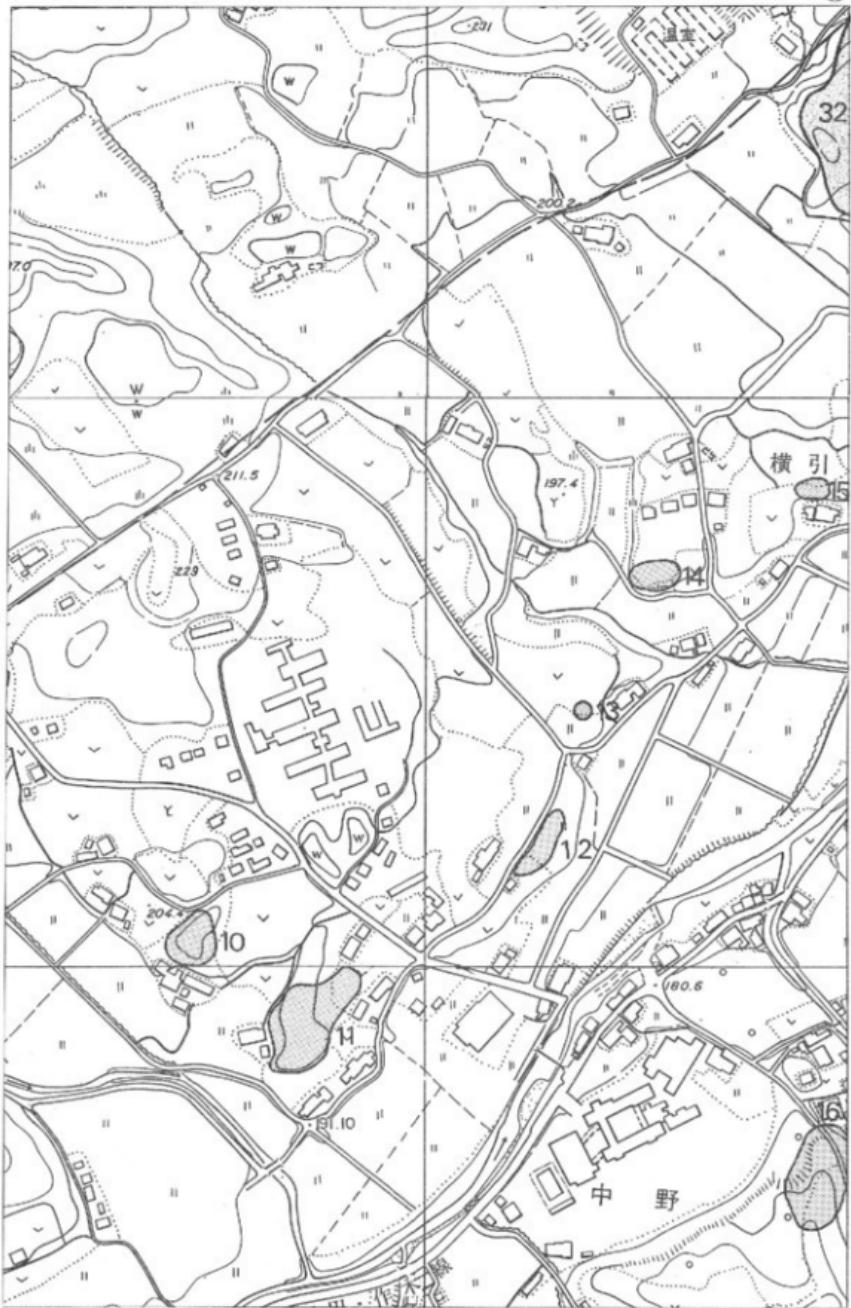
⑤



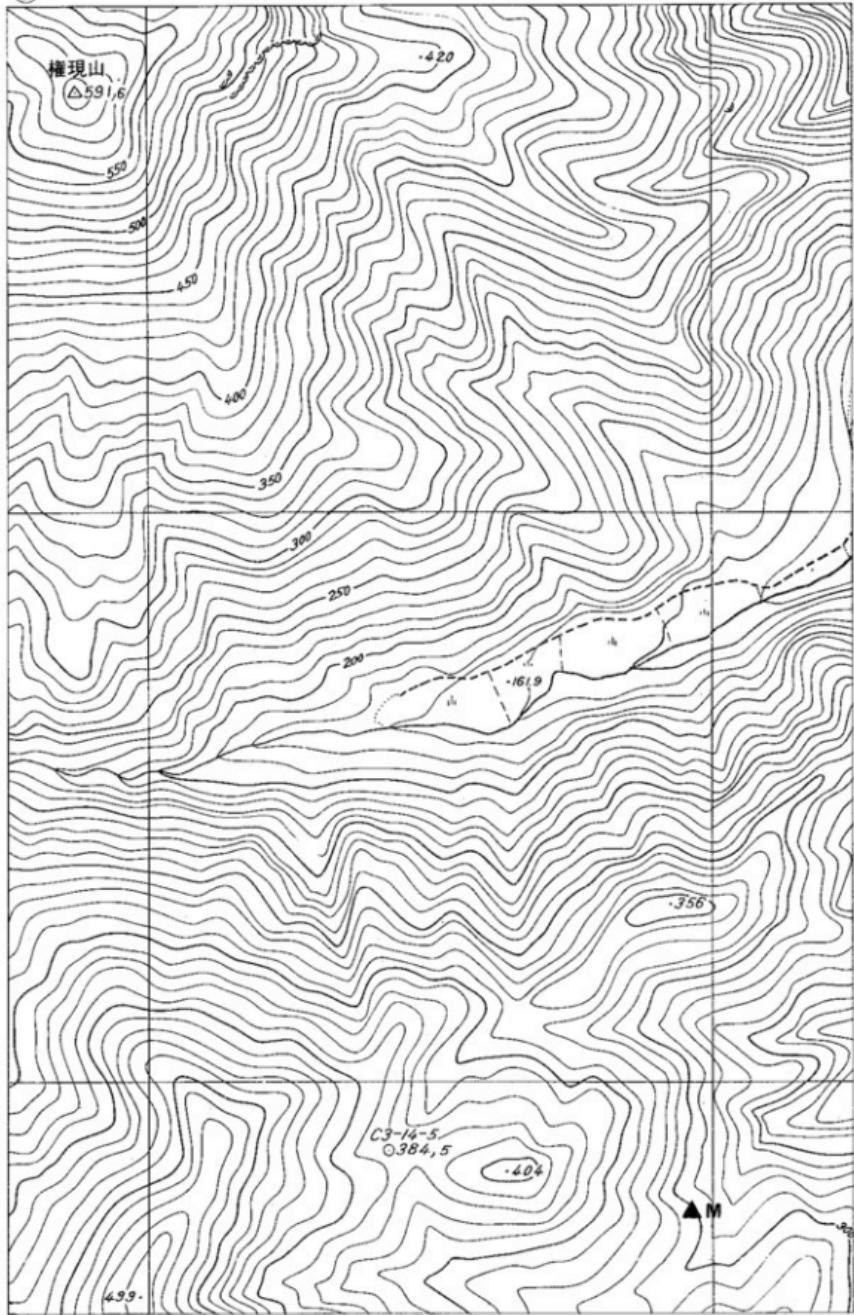


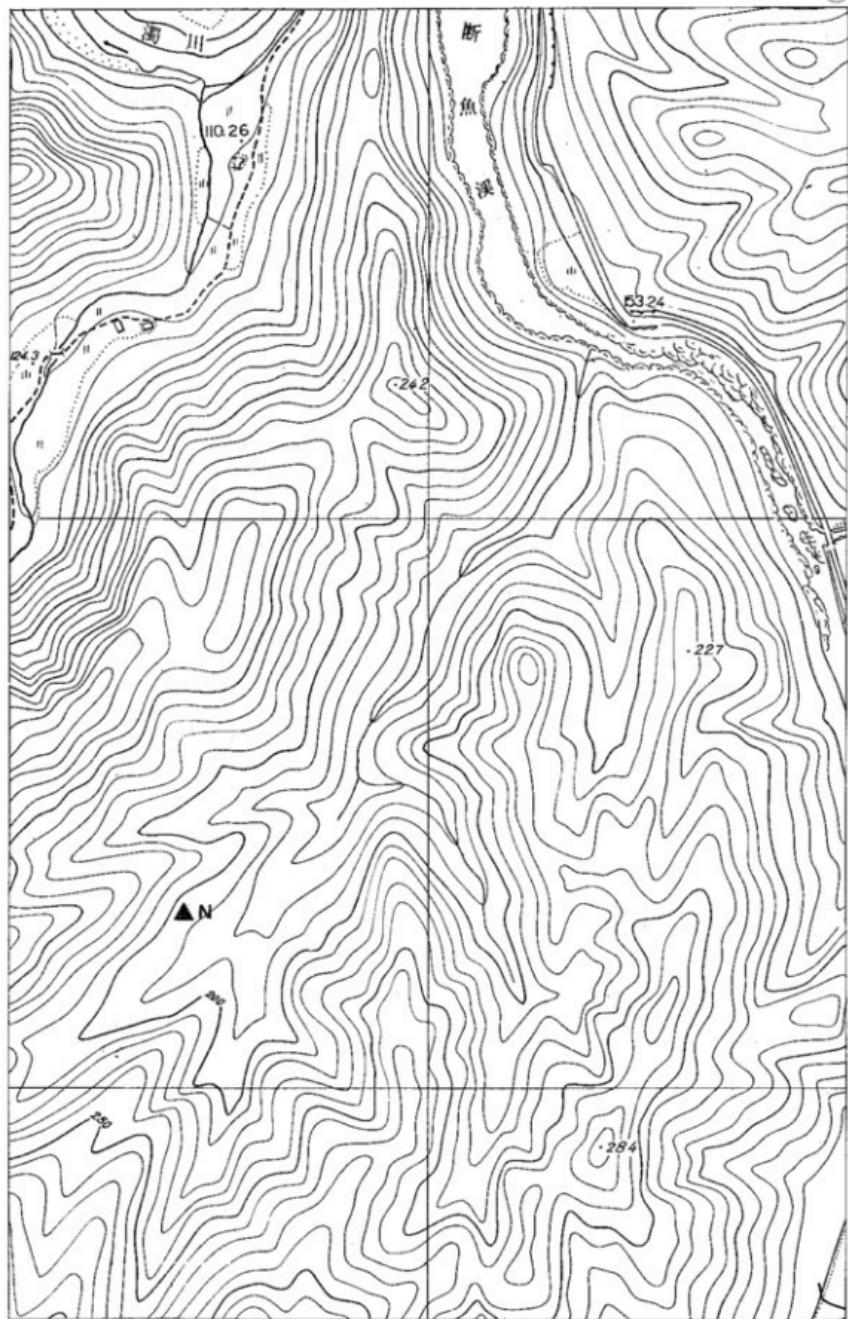
⑦



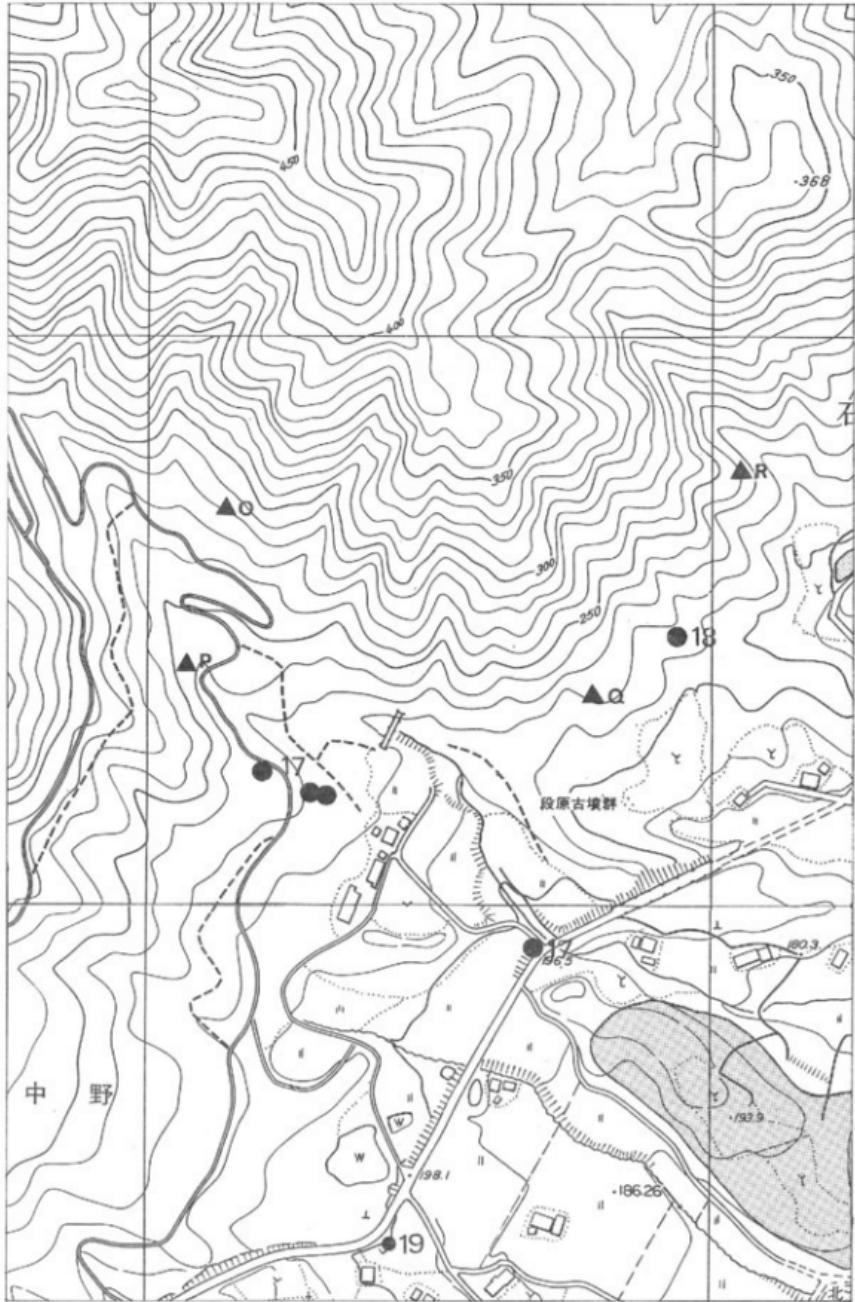


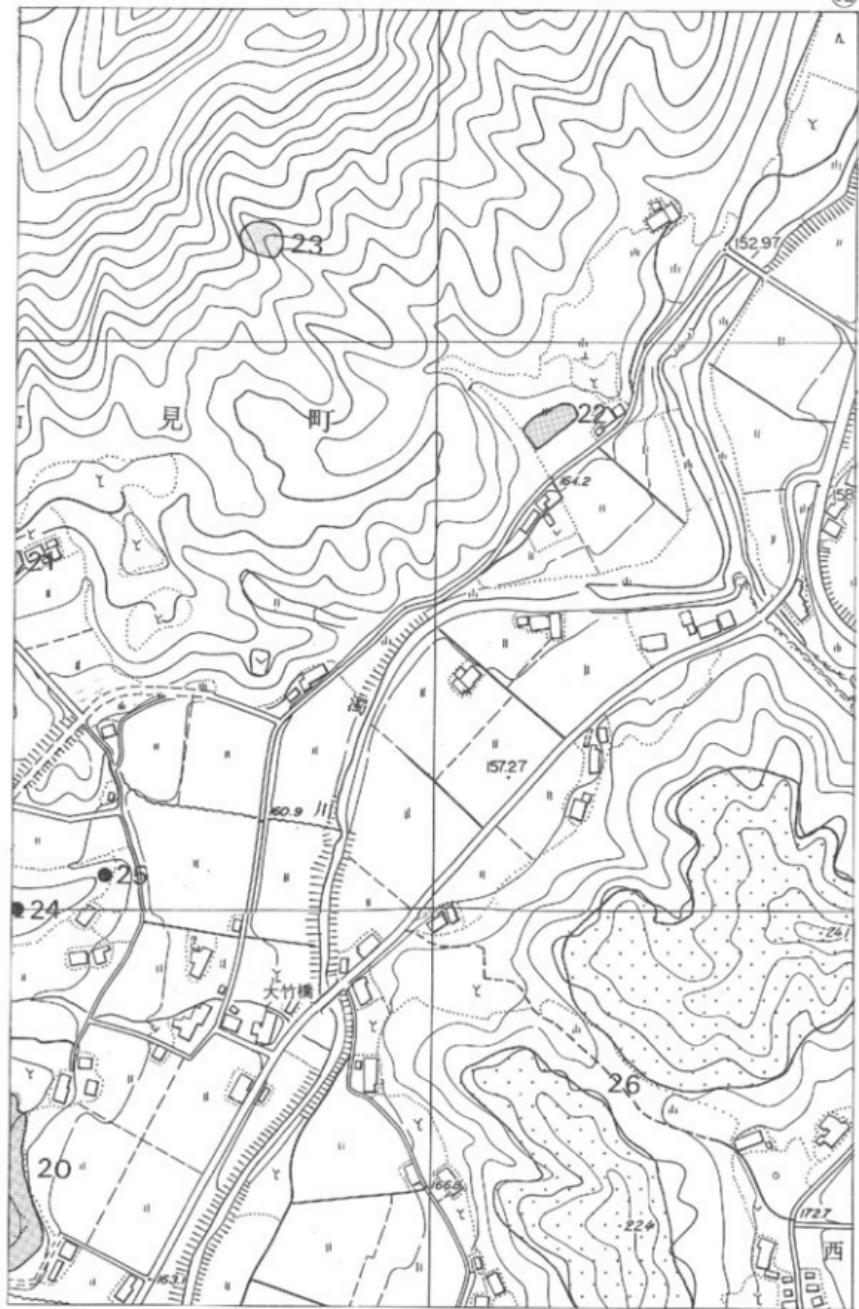
9



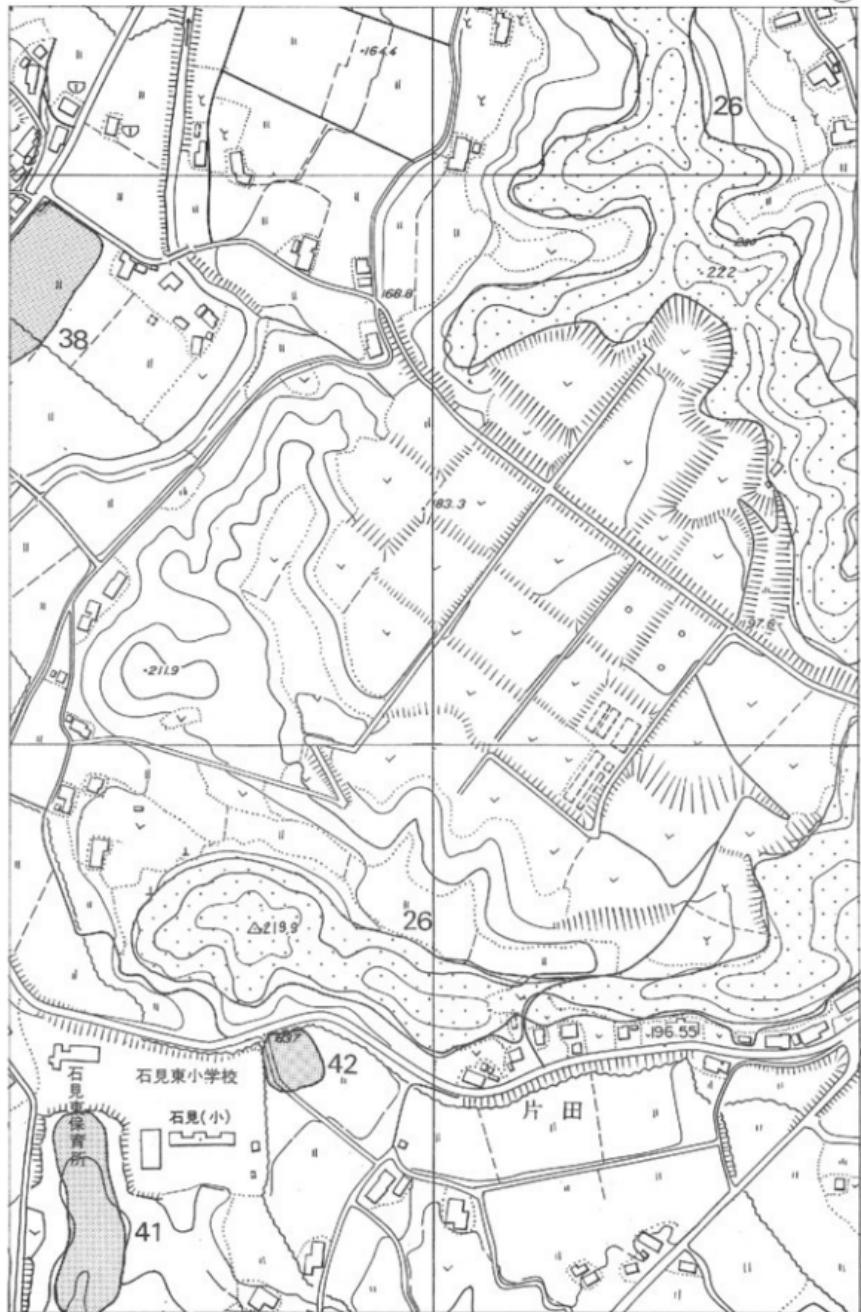


⑪









### III. 遺跡一覧表

記号	地図番号	名 称	種 別	所 在 地	概 要	備 考
1	②	後原古墳群	古 墳	矢上 後原	横穴式石室、奥行約6m、幅約1.5m 調石機 天井石一部落下	鳥居原 遺跡地図II No.11
2	⑤	上別所古墓群	古 墳	中野 上別所	五輪塔 約10基分が石材が集積されている	鳥居原 遺跡地図II No.14
3	⑥	風呂ヶ谷道路散布地	散 布 地	中野 小原追	土師器	鳥居原 遺跡地図II No.14
4	⑦	塔の本古墳群	古 墳	中野 別所	直径約10mの円墳、馬具出土	鳥居原 遺跡地図II No.14
5	⑦	落子遺跡祭祀跡	遺 路	矢上 後原	手づくね土器、有孔円板、土製勺玉、須恵器	鳥居原 遺跡地図II No.15
6	⑦	後原遺跡散布地	散 布 地	矢上 後原	道路工事中に、竪穴式石室一基確認	鳥居原 遺跡地図II No.16
7	⑦	割田古墓群	古 墳	中野 中別所	五輪塔が集積されている。岡場整備時に他の場所のものを運んでいる	鳥居原 遺跡地図II No.16
8	⑦	割田古墳群	古 墳	中野 中別所	横穴式石室、長さ約7m、高さ約1.5m 幅約1.3m、無指定	鳥居原 遺跡地図II No.16
9	⑦	矢上郡山城	山 城	山城 郡	壁塗	鳥居原 遺跡地図II No.21
10	⑧	名子山遺跡	散 布 地	中野 森実	弥生土器、土師器、陶磁器、 地山をV字状に掘り込んだ断面が露出	
11	⑧	森ノ下遺跡	散 布 地	中野 森実	弥生土器、土師器、須恵器が多數散布、遺構は不明	
12	⑧	高野屋遺跡	散 布 地	中野 横引	須恵器、陶磁器	
13	⑧	松山上遺跡	散 布 地	中野 横引	須恵器、陶器、鉄片、遺物の量少なく、遺跡の形状もほとんど留めない	
14	⑧	松山遺跡	散 布 地	中野 横引	須恵器、弥生土器片、現状は住宅地であり、範囲は狭い	
15	⑧	坂木屋遺跡	散 布 地	中野 横引	土師器、須恵器、近世陶磁器	
16	⑧	茅場谷遺跡	散 布 地	中野 茅場	蛤刃石斧、土師器、須恵器	鳥居原 遺跡地図II No.2
17	⑪	段原古墳群	古 墳 群	中野 段原	横穴式石室、円墳	鳥居原 遺跡地図II No.17
18	⑫	飯屋古墳群	古 墳 群	中野 飯屋	一基のみ確認、横穴式石室、円墳	鳥居原 遺跡地図II No.18
19	⑬	左山古墓群	古 墓 群	中野 飯屋	五輪塔 2基	
20	⑪~⑭	饭屋遺跡祭祀跡	祭 墓	中野 飯屋	銅鐸出土地、他に須恵器散布	鳥居原 遺跡地図II No.24
21	⑯	大元迫遺跡	散 布 地	中野 飯屋	近世陶磁器	
22	⑯	横ヶ迫上遺跡	製鉄関係	中野 飯屋	溝状造構	
23	⑯	横ヶ迫遺跡	散 布 地	中野 飯屋	土師器、須恵器、陶磁器	
24	⑯	饭屋第二古墓群	古 墓 群	中野 飯屋	五輪塔	
25	⑯	饭屋第一古墓群	古 墓 群	中野 飯屋	五輪塔	
26	⑯~⑯	中山古墳群	古 墳 群	中野 井原		鳥居原 遺跡地図II No.37
27	⑯	ドウショウ坂古墓群	古 墓 群	中野 段原	墓壙断面が露出、墓石(天明四年銘)	
28	⑯	左山遺跡	散 布 地	中野 段原	陶磁器片	

29	⑬	ドウショウ坂遺跡	散布地	中野 仮屋	土師器、須恵器、陶磁器	
30	⑭	源太ヶ城	山城跡	中野 町	石見町の遺跡第1集に図面あり	
31	㉙~㉚	加茂山古墳群	古墳群	中野 町	方墳を主とした10数基からなる古墳群 詳細不明	
32	㉛	余勢城	山城跡	中野 余勢	多胡氏築城、永禄4年(1561年)吉川氏より落城したという	鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.142
33	㉛	余勢の原遺跡	散布地	中野 余勢	弥生土器、石斧、土師器、須恵器、大規模な集落跡と考えられる	鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.142
34	㉛	反原遺跡	散布地	中野 段原	須恵器、土器類やや多い 奈良、平安時代の住落跡と考えられる	
35	㉛	且原一号遺跡	散布地	中野 段原	須恵器	
36	㉛	且原二号遺跡	散布地	中野 段原	須恵器 陶器	
37	㉛	中原遺跡	散布地	中原 町	土師器 陶磁器	
38	㉛	池の尾遺跡	集落跡	中原 段原	須恵器	鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.142
39	㉛	和泉原遺跡	散布地	中原 幸米	弥生土器	鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.142
40	㉛	鳥居の段一号遺跡	散布地	中野 片田	土師器	
41	㉛	鳥居の段二号遺跡	散布地	中野 片田	土師器	
42	㉛	片田遺跡	散布地	中野 片田	工事中に甕が出土	鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.157
43	㉛	余勢遺跡	散布地	中野 橋引	陶磁器	
A	①	ホトコロ鉢跡	製鉄遺跡	中野	斜面をL字型に削り平坦面を多く、非常に鉄滓の量が多い、洗浄、近世陶磁器を採集	
B	②	大利鉢跡	製鉄遺跡	矢上 後原	鉄穴跡により鉢本体は、かなりの損壊をうける	鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.157
C	②	平四郎堤上鉢跡	製鉄遺跡	中野 上別所	鉄滓の量は少ない、墓地による変更が著しい	
D	②	上別所鉢跡	製鉄遺跡	中野 上別所	遺跡の本体は鉄穴池により壊されている	
E	④	萩原二号鉢跡	製鉄遺跡	中野 萩原		
F	④	矢瀬鉢跡	製鉄遺跡	中野 仮屋		
G	⑤	鬼の木戸鉢跡	製鉄遺跡	中野 上別所	約10.8×9.3mの平坦面をもつ	
H	⑤	横岩鉢跡	製鉄遺跡	中野 上別所	約11.7×8mの平坦面をもつ、平坦面上には巣石がある	
I	⑤	門谷西鉢跡	製鉄遺跡	中野 上別所	門谷伊より西~50m離れた墓地の周辺に鉄滓が散乱している	
J	⑤	門谷鉢跡	製鉄遺跡	中野 上別所	昭和56年に発掘調査を実施、小舟を確認している	鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.168
K	⑤	重屋鉢跡	製鉄遺跡	中野 小原追	約22.5×16mの平坦面をもつ、平坦面から林道にかけて鉄滓が散乱している	
L	⑥	高鉄穴下鉢跡	製鉄遺跡	中野 仮屋	約11.5×10mの平坦面をもつ、多量の鉄滓が散乱している	
M	⑨	塚が渕奥一号鉢	製鉄遺跡	中野		
N	⑩	塚が渕奥二号鉢	製鉄遺跡	中野		
O	⑪	萩原横手ド一號鉢跡	製鉄遺跡	中野 段原		
P	⑫	萩原横手ド二號鉢跡	製鉄遺跡	中野 段原		
Q	⑫	田の迫鉢跡	製鉄遺跡	中野 仮屋		鳥根県 遺跡地図Ⅱ No.169
R	⑫	大元追鉢跡	鉢跡	中野 段原	吉川寺に人頭の鉄滓、鋸壁も散乱し約30mにも及ぶ。等の指標に平坦面の一帯と考えられるものを残す	

## IV. 調査の概要

### (1) 繩文・弥生時代

#### i) 繩文時代

今回の分布調査において、縩文時代の遺跡は発見されなかった。唯一、中野地区上別所において縩文時代の石斧が御神体として祀られている祠が確認されたにすぎない。しかし今後、新たに遺跡が発見される可能性は少なくはない。現に1990年、今回の調査区でない矢上地区小掛谷で纖維混入無文土器及び黒曜石片が採集されている。

#### ii) 弥生時代

濁川の河岸段丘の丘陵先端部に数箇所の遺跡が確認された。いずれも鉄穴流しで洗い残された鉄穴残丘上を中心に分布している。森実川と濁川の合流する地点では名子山遺跡、森の下遺跡がそれであり、特に名子山遺跡は深さ2mのV字溝が道路による断面に見られ、環濠集落址の一部の可能性がある。また、森の下遺跡と名子山遺跡は比較的近距離に位置し、もともと一つの遺跡であったことも想定される。

濁川と門谷川との合流地点には、余勢の原遺跡を中心とした弥生時代の諸遺跡が分布している。これらの遺跡は、濁川の氾濫源よりやや高所の台地上に築かれており、規模の大きな集落遺跡と考えられる。なかでも現在野球場と中野公民館のある周辺に所在する余勢の原遺跡では、後期の上器が量的にも多く採集されているが、前期、中期の土器もかつて採集されており、弥生時代を通じて連續と営まれた遺跡のようである。昭和58年に発掘調査を行わず実施されたグランド照明工事中にも多量の土器が出土し、それらの土器は町の中央公民館にて保管している。中原遺跡、旦原一号、二号遺跡、池の尻遺跡は弥生時代後期の土器が主に採集される遺跡であり、濁川に近い位置にある池の尻遺跡では、かつて圃場整備中に木製品が出土している。また、和泉原遺跡では以前、特殊壺型土器が採集されている。

弥生時代の墳墓については、中山古墳群中にその可能性のあるものが含まれており、他にも、仮屋古墳のある尾根上に存在する可能性がある。また、この仮屋古墳のある尾根の隣の尾根上に吉川正氏が貼石をもつ墳墓を確認していたが、今回の調査したところ完全に削平されて畠になっていた。いずれにせよ、中山古墳群をはじめとして近辺の尾根上に分布の中心があるようで、詳細については今後の発掘調査に待つところが大であろう。

### (2) 古墳時代

集落跡と考えられる遺跡では、前述の弥生時代遺跡と重複する遺跡も多いが、他に分布地点は増加する。森実川流域においては、現在墓地団地造成等でかなりの破壊を受けた後原遺跡が挙げられる。後原遺跡の位置する丘陵の先端には、昭和47年工事中に偶然発見された、祭祀跡と考えられている落子遺跡があり、<sup>(1)</sup>後原遺跡と落子遺跡とは同時期の遺跡であった可能性が高い。対岸の丘陵先端部には鳥根県指定史跡の割田古墳があり、森実川を上流に向かってさかのぼれば塔の本古墳、後原古墳、など横穴式石室を持つ古墳が点在する。同様に茅場川流域には茅場谷遺跡、前竹古墳等が分布する。井原川との合流点の付近には、小規模ながら古墳時代後期の積ヶ迫遺跡が確認された。

中野地区井原地区の境界となっている中山丘陵上には、総数約80基からなる中山古墳群が分布する。詳細は後述するが今回の分布調査にあわせて中山古墳群D地区の一部にて墳丘測量を行った。中野地区には、他に中山古墳群と同時期と考えられている加茂山古墳群や、横穴式石室をもつ仮屋、段原古墳群が分布する。この仮屋、段原古墳群は、濁川対岸に中山丘陵を望む向歛無山山麓付近一帯に築かれた古墳群である。段原古墳群は5基存在したことが確認されているが、5号墳は農免道工事により未調査のまま消滅し、4号墳もかなりの損壊を受けている。今回の調査の結果、1号墳、2号墳も墳形の反別がつかないほど崩壊しており、3号墳は林道建設により墳丘の約1/3が削り取られ、石室は盜掘により上面から掘り込まれ開口している。仮屋古墳群は横穴式石室3と遺跡目録に記されているが、1基のみ明確に確認できる。その1基は径約10mの円墳であり、墳丘の約1/4は崩れている。

### (3)奈良・平安時代

今回の調査で、奈良・平安期の遺跡は多数確認された。中野地区森実、横引では、濁川に向かって張り出した丘陵の最先端部に高野屋遺跡、松山下遺跡、坂木屋遺跡を新たに確認した。以下その概要を述べる。

高野屋遺跡は現水田面より比高差約30m、眺望良好な場所に位置する。集落の立地点としては極めて優れており、かなり大規模な古代集落址が存在したものと思われるが、北側に向かっては既に破壊されている。松山下遺跡は、高野屋遺跡の東隣の削平された丘陵先端に、わずかに遺物の散布を認める遺跡である。ここでは須恵器及び鉄片を採集した。遺跡としては既に大半が破壊されたものと思われる。この二つの遺跡よりやや濁川の下流側へ下ったところで、突出した丘陵の先端部に坂木屋遺跡を確認した。畠地造成及び民家の用地造成の際に遺跡はかなり破壊され、その一部が残存したものと思われる。

中野地区段原、仮屋においても当該期の遺跡を確認した。弥生時代の遺跡と重複するも

のもあるが、中原遺跡、且原一号遺跡、且原二号遺跡、池の尻遺跡、反原遺跡らがそれである。池の尻遺跡は現在水田であるが、かつて圃場整備の際に円面鏡が出土しており、都衙跡の推定地として知られる。段原遺跡は、仮屋遺跡（銅鐸出土地）の西隣の平坦な丘陵上にあり広い範囲で遺物が採集される。以前からも奈良・平安期の須恵器片が採集されていたようで、集落址と考えられるものである。

#### (4)鉛（製鉄遺跡）

今回の調査の重点の一つである鉛跡（製鉄遺跡）の分布についてであるが、遺跡名等の詳細については前記の遺跡分布図、一覧表による。またその考察は次章で示すこととし、ここでは調査に関しての概要のみを簡単に述べる。

鉛跡は、これまで中野地区北部で7ヶ所しか知られていなかった。今回の調査区に限つて言うと3箇所の所在が明らかになっていたにすぎない。調査区には他に、地元の人には知られていたが台帳に登録されていなかった鉛跡が数箇所あり、これらを合わせると計15ヶ所の鉛跡が今回確認されたことになる。中野地区全体で集計すれば、その数は20ヶ所を超えるものとなった。

しかし今回の調査は時間的制約もあり、また草木の生い茂るなか行ったということもあって十分とは言い難い。今後さらに発見される可能性は高いと思われる。

#### (5)中山古墳群について

中山古墳群は、昭和51年、同56年、同63年の3回発掘調査が行われている。B地区に於いて行われた昭和51年の調査は花木園地造成事業に伴う調査であり、前方後方墳（B-1号墳）等が検出された。昭和56年には、保存の為の資料を得る目的での学術調査として、D-23号墳が発掘調査された。昭和63年にはA地区南端を石見トップノーキー建設に伴い発掘調査が行われている。これらの調査の詳細については、個々に報告書、概報等が刊行<sup>(2)</sup>されている。

今回の測量調査はD地区6、7、8、16号墳の4基について行った。後述する通り前方後円墳を1基確認するなどの新知見が得られた。

D地区は中山丘陵の中ほどに位置し、標高は230m程度で周辺の低地からの比高差は約60~70mである。今回調査を行った4基の古墳は、南東方向、北方向、南西方向に向かう尾根の交点付近に位置している。6、7号墳はその南東方向に向かう尾根上に連続して築かれており、尾根の交点に8号墳、北方向に隣接して16号墳という位置関係である。以下確認された事実を踏まえて、それぞれの古墳について述べていく。

(註)

(1)前鳥已基「石見における祭祀遺跡の新例」『季刊文化財』23 昭和49(1974)年3月

(2)石見町教育委員会「中山古墳群発掘調査概報」昭和52(1977)年

石見町教育委員会「中山古墳群発掘調査報告書」昭和57(1982)年

鳥根県邑智郡石見町教育委員会「中山古墳群発掘調査報告書」－第3次－平成元(1989)年3月



中山古墳群地区別図 (1:10,000)

#### D-6号墳

墳丘の規模は約10m×10mの方墳である。斜面をカットしその土を尾根の先端方向に盛り、墳丘を構築したようである。南西斜面は比較的残存状況は良いが、北東斜面にかけては、その盛り土を失いつつある。内部主体は不明であり、遺物も採集されていない。

#### D-7号墳

D-6号墳と同様に斜面をカットし、尾根の先端方向に盛り土し構築している規模約8m×8mの方墳である。尾根両側斜面の盛り土の流失が著しく墳丘は明確でない。現状としては台形に近いテラス状になっており、尾根先端方向への盛り土が墳丘のなごりを留めている。また墳頂も緩やかな自然傾斜となり保存状態はあまり良くない。6号墳7号墳とともに斜面という自然地形を利用して、削った土を尾根先端方向に盛るという手法で労力の節約を図っているようである。7号墳も内部主体、遺物ともに不明である。

#### D-8号墳

Y字状に交差する尾根の交点に築かれた約12m×10mの方墳である。東西方向に長く形状としては長方形に近い。内部主体、遺物ともに不明である。この8号墳は、6号墳、7号墳の次に構築されたと思われる。

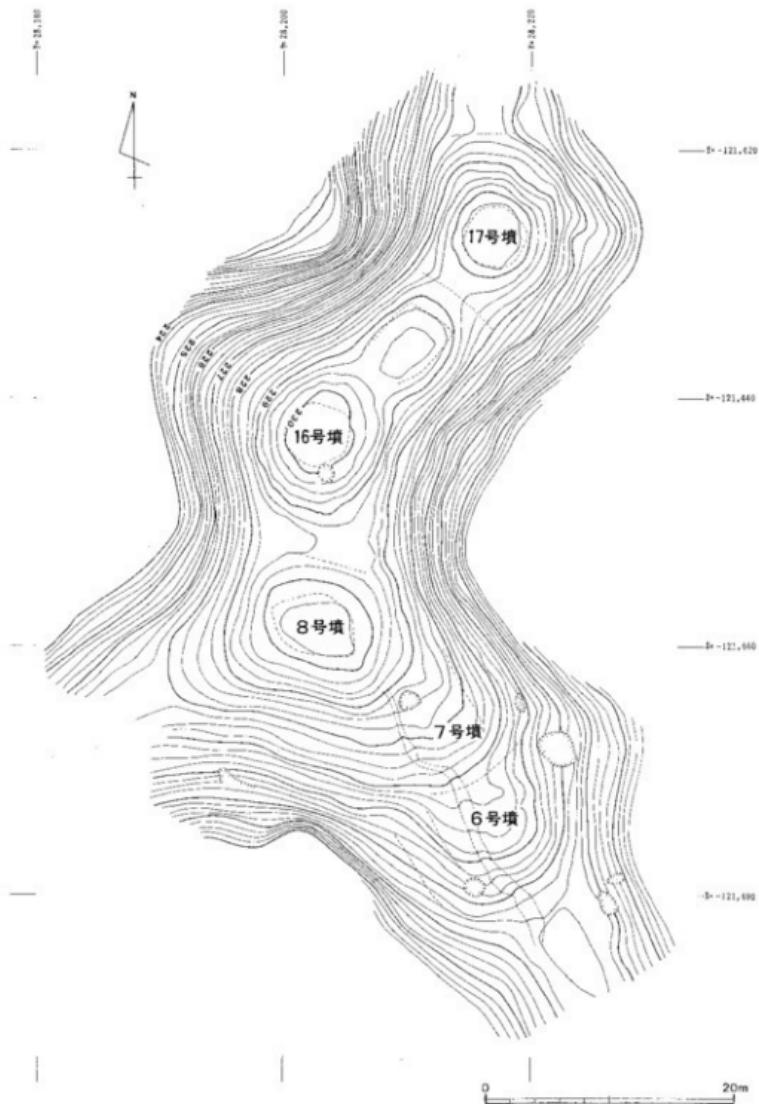
#### D-16号墳

8号墳の北側に隣接して築かれた全長約22mの前方部約10m、後円部約12mを計る。前方部先端幅約7m、くびれ部幅約6.5mを計り、長方形に近い形の前方部を持つ。ただし前方部先端は両側の斜面が急で、墳丘が削られた可能性があるので、前方部の幅が本来は若干広かったことも考えられる。前方部の墳頂には約5m×7mの平坦面を築いており、後円部との高低差は約50cm~1m程度である。また後円部には人頭大の石が散乱している。この石は主体部に用いられた石材の可能性があり、堅穴式石室を持つことも考えられる。この16号墳についても遺物は採集されていない。

#### D-17号墳

16号墳の北東方向に築かれている方墳である。規模は約12m×12mである。古墳の作られている尾根は、この17号墳の先から北へ曲がり、尾根は痩せていく。標高も下がるが、17号墳はその尾根の広い部分の北端に位置している。墳頂部はもともと、現況より広がったと思われるが、盛り土が流失しているようである。墳丘自体は東側に広がっていたようであり、西側斜面への流失は少ない。内部主体は不明で、遺物も採集されていない。

(濱 健一)



中山古墳群D地区 6・7・8・16・17号墳測量図

## V. ま　と　め

①石見町においては過去にも遺跡の分布調査が実施され、その結果は昭和58（1983）年に『石見町の遺跡』として報告されている。今回あらためて分布調査を行うに至った経緯や目的については先に述べたところであるが、強調すべき点は、石見町域にいかなる特色を有する文化財が存在するかを突き止めることであり、また悉皆的な踏査によって町域文化財の総体を捉えて、町の歴史的変遷の具体的過程とその特性を解明することである。このことは、現在、町を挙げて推進されている地域づくりの諸事業と深く関わるものである。したがって今回の調査が先の調査の継続でも、欠を補うものではなく、新たな視点と課題のもとに行われたものであることを、まず明かにしておきたい。

②1990年度の踏査域は濁川の北岸、中野地区を中心としている。そして古墳群の調査にもかなり重点を置いて調査を実施した。

調査の結果判明した遺跡については既述の通りである。先土器・縄文遺跡についてはこれを検出することは出来なかったが、縄文時代の所産とみられる磨製石斧1点の存在を確認したことは貴重である。かつて井原地区でも圃場整備の際に同一型式の石斧が採集されているし、断魚渓発見の縄文後期福田KII式に属する異型壺形土器は余りにも有名である。こうした諸事実の示すところは、かなりの縄文遺跡の存在がかつてあったことを思われるが、近世の鉄穴流しにともなって破壊消滅したものが少ないと考えさせる。

弥生時代の遺跡は濁川左岸の丘陵先端部で2ヶ所を確認した。とくに名子山遺跡で「V」字溝の断面を発見したのは収穫といってよい。濁川両岸に点々と分布する弥生時代の遺跡については今後共入念な調査研究が求められるところである。

古墳及び古墳時代の集落遺跡については中山古墳群の調査を除いては具体的な成果をあげることはできなかった。今後採集土器の精確な検討が進めばこの時代の集落跡についても様ざまな事実が明らかになってくるであろう。ついでながら大字井原の大峠山古墳群出土と伝えられる銅鏡が町教委のもとに所蔵されることになったのは幸運であった。この古墳群から古式の俵形埴の出土も知られており、これらの特殊な遺物群が招来される政治的な地域情勢解明も原始・古代の地域史研究にとって重要な課題である（石見町、1973年）。

奈良・平安時代の遺跡については、その分布状態と遺跡数の多いことに注目する必要がある。中野地区の場合、濁川にのぞむ丘陵先端で多数の遺跡が検出され、また池ノ尻遺跡

のように低位段丘もしくは沖積微高地上に広がる大型の集落遺跡もある。あるいは中野地区自治会館のある台地平坦部のように全面的にこの時代の須恵器片を採集できる遺跡もあった。

島根県教育委員会による旭町重富地区の調査は注目すべき成果を提示している。重富廃寺跡そのものの構造は明確にならなかったものの、同時代の瓦窯、集落跡が判明し、さらにこれらに先行する古墳群の構成について重要な知見が得られたようだ。かつて吉川正氏が端穂町の久永須恵器窯の展開について卓抜を示したように、中国山間部の奈良・平安期の開発については大胆な問題設定と徹底した調査研究を早急に行う必要が認められるのである（吉川正、1976年）。

③今回の調査の一つの特徴は、多数の製鉄関連遺跡の存在を突き止めたことである。以下その結果と若干の考察を示しておく。

石見町では1983年の分布調査で60箇所の製鉄遺跡が知られていた。その後矢上地区の西南部丘陵斜面で10箇所の新発見があり、また今回の分布調査では中野地区北部15箇所以上の製鉄遺跡の存在が確認されている。今後町内全域の分布調査が完了すればさらに多数の遺跡が検出される可能性はきわめて高い。日置地区には「鉄穴ヶ原」の地名も残されており、先に指摘したように最終的には150～200箇所程度の鉄・鉄器生産遺跡の所在が判明するものと予想している。遺跡分布の実態とその特性については今後の分布調査の結果をまって検討すべきであるが、これまでの調査から知られた若干の特徴点をあげると以下のようになる。

- I) 中野地区北部の踏査によれば、大規模な鉄滓の捨て場をともなう遺跡は概して山岳と丘陵の傾斜変換線上に分布する傾向があり、小舟等の炉の地下構造と金屋子紙の祠が現存する門谷たたら遺跡はその代表的なものである。
- II) 矢上川に注ぐ小川の谷間に点々と遺跡が散在することは端穂町の場合と同様であるが、中にはホトコロ鉛跡のように谷口から約2kmも入った、標高500mの高所に営まれる例もあり、燃料と砂鉄の採取の相関性によって決定される製鉄炉の立地条件が改めて想起される。
- III) 遺跡の密集度が示されるケースとして矢上地区西南部の分布をみると、ここでは約200×100m範囲の斜面で約10箇所の製錬炉跡が検出され、これらにともなう「鉄穴流し」の溝が縦横に走っていることが判明している。これらはいわば乱開発的に数箇所単位で短期間次々に操業が行われたことの軌跡であろうか。
- IV) 往時の町域の「たら」操業の様相は山丘地形の著しい変容振りによっても想像で

きる。標高200～250mの傾斜変換線から濁川の河岸にかけては現在「鉄穴流し」によって瘤状に残された丘陵の一部があちこちに見られる。その崖面からはおよそ10～30mの高さで削り取りれているように見受けられた。平均的には15m前後が砂鉄採取のために崩されたのではないだろうか。かなり徹底した自然破壊の様相がここにはある。「濁川」の異名を取ったのもこのような「鉄穴流し」によるものである。高橋一郎氏によれば、奥出雲の近世「高殿たらら」の場合ごく平均的に見積もって、一年間に70回の操業が行われれば約20万m<sup>3</sup>の量の母岩が必要と計算している。そして「これは谷川沿いの山肌の高さ10mで奥行き2mの延長10kmにわたる量」としている（高橋一郎・1989年）。今後は旧地形の復原により採取母岩の量を算出して、これを製鉄遺跡の在り方と対比することもこの地の鉄生産の実態を解明するのに有効ではなかろうかと考える。

ところで石見町日貫地区には「高殿たらら」の地下構造の判明した遺跡がある。福原たらら跡がそれで、水害による水田崩壊時に発見されて1983年に応急の調査が実施された。遺跡は小河川に臨む低位段丘上にあり、地下構造は上下2段に6基の小舟を配し、最下部に「伏隠」を設けたものである。年代は出土磁器から江戸時代中期と推定されている。

このような本格的な床釣り施設をもつ「高殿たらら」の出現は「天秤ふいご」の発明によるとされ、その時期は貞享・元禄の頃とみられている（河瀬正利・1983年、高橋一郎・1990年他）。福原たららがそうした「高殿たらら」の出現期に近い操業の遺跡とすれば複雑な地下構造との絡みで注目を集めることになろう。またこの遺跡では本格的な床釣りの地下構造をもつ製鉄炉が構築される以前にも製鉄が行われており、それとの関連も追及する必要があるようだ。

④中山古墳群の調査は測量を主体とするものである。D群の南端域を中心に調査を実施したが、その結果D-16号墳が前方後円墳であることを確認できたことは大きな成果といえる。島根県下でもっとも新しい集成作業によると94基が数えられている。そのうち石見部では8基が知られ、江川流域では旭町のやつおもて10号墳（古墳時代後期）が存在するに過ぎなかった。（渡辺貞幸他・1991年、松本岩雄・1991年）

今次発見された中山D-16号墳は小規模とはいえ、その立地点や墳形の特徴等から古式の様相が伺え、かつて発見されたB-1号墳等とともに中山古墳群の性格を解明する鍵となる古墳といってよかろう。

われわれが実施した1990年度の分布調査は町域全体の5分の1にも満たないものである。したがって結果を云々する段階でないことは当然であるが。少なくとも今次調査だけ

でも様々な注目点、特色ある文化財の存在を知り得たことは今後の調査について大いなる期待とますますの必要性が提起されたものといえよう。

(田 中 義 昭)

参考文献

- 石見町教育委員会編 「石見町の遺跡」 昭和58(1983)年
- 石見町役場 「石見町誌」 上巻 昭和47(1972)年
- 古川正 「瑞穂町の遺跡」『瑞穂町誌』第3集瑞穂町 昭和51(1976)年
- 河瀬正利 「近世たら製鉄址研究をめぐって」『日本製鉄史論集』 昭和58(1983)年
- 〃 " 「近世製鉄遺跡研究をめぐって」第9回横田たら勉強会発表資料 平成3(1991)年
- 高橋一郎 「奥出雲伊川水系に於ける近世企業たたらのたら吹き操業と砂鉄採取の盛衰について」  
—それに伴う流出土砂量の推定—『山陰地域研究 伝統文化編』 平成元(1989)年
- 〃 " 「奥出雲横田たら 奥出雲文庫3」 平成2(1990)年
- 松本岩雄・吉川正 「福原たら跡調査報告書」「島根県生産遺跡分布調査報告書II」  
昭和59(1984)年
- 渡辺貞幸他 「前方後円墳集成 中国・四国編」山川出版社 1991年(本集成の出雲・石見・隠岐の項による)
- 松本岩雄 「山陰」「古墳時代の研究10・地域の古墳」西日本 雄山閣 平成3(1991)年

図版 1



中野地区中心部（余勢の原附近）



中野地区  
(余勢城より南西方向)



中山古墳群D地区遠景



上別所発見の石斧（矢印）



名子山遺跡断面

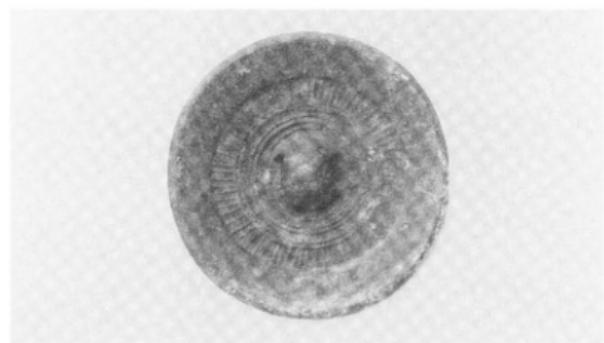


森の下遺跡近景

图版 3



中山D-16号墳全景（南から）



中山古墳群  
D地区出土銅鏡



上別所古墓近景



トウショウ坂古墓断面



萩原横手下 1 号墳



(参考) 福原鉢断面

島根県邑智郡  
石見町詳細遺跡分布調査報告書Ⅰ  
—石見町の遺跡第二集—

発行日 平成3(1991)年3月

編集・発行 島根県邑智郡石見町教育委員会  
696-01島根県邑智郡石見町矢上  
TEL (08559)5-1210

印 刷 柏 村 印 刷 株 式 会 社